白金薮

２月号

平成２９年２月発行　　第７２号

白金葭定例句会案内

三月十七日（金）　〃　第五　兼題：東風、涅槃
四月二十一日（金）　〃　第三　兼題：霞草、啄木忌
五月十九日（金）　〃　第三　兼題：新茶、雛罌粟

兼題句参考句（三月十七日分　東風、涅槃）

デイサービスのバスの行き交ふ桜東風　古閑容子
先生とその先生に岬東風　青木伊佐恵
夕東風や海の船ゐる隅田川　水原秋櫻子
東風に晒す額の広さは父譲り　矢島まさる
耀声の東風に飛び交ふ魚市場　鶴岡しげを
強東風の鳴門わが髪飛ばばとべ　山口誓子
強東風に製紙白煙折れ千切れ　平野ひろし
あしゆびをそよがせ涅槃したまへり　恩田侑布子
一の字に遠目に涅槃したまへる　阿波野青畝
土不蹈（つちふまず）ゆたかに涅槃し給へり　川端茅舎
座る余地まだ涅槃図の中にあり　平畑静塔
涅槃会や誰が乗り捨ての茜雲　上田五千石
近海に鯛睦み居る涅槃像　永田耕衣
涅槃会に暗黙の波膝送り　山本松枝
涅槃会の仏の足の方へ寄る　森田智子
涅槃会に逢ひし生身の男女かな　玉出雁梓幸

月例句会報（'17／2／17　10名欠2　梅、雪解）

雪解の枝に雀かちらちらす　飯田孝三
寒晴れの神前どんと土俵入り
手賀沼や日を満面に春一番
寒梅や枝に触るゝまで絵馬の嵩
万太郎踏みし石段梅明り

寒風や令嬢あゆむ烏森　増田陽一
寒林の透きて還らぬもの多し
雪解や球根既に目覚めをり
紅梅も吾も深夜は眠るなり
春の雪結晶崩れやすきかな

町中の雪解け水について行く　光成高志
蒼天や末黒の土手の川に鶴

一本の白梅にほふ戸口かな
鶫つぐみ枯土手歩み胸を張る
立春の白鳥ぐいぐい寄ってくる

春の風邪生姜肉桂（シナモン）汁啜る
冴返る鰯の頭落とすとき
雪しずく潜る茂吉の記念館
雪解村茂吉の肉声流れけり
足元に旋毛たつ坂梅匂ふ

伝道を東風に励める神田かな
どよもすといふ明るさの春一番
手賀沼の波の立つ見よ春一番
落箔の月とも日ともお涅槃図
咆哮の屏風の虎の古りにけり
雪解川かけつこをして下校の子

光　みち

如月や満艦飾のちらしずし
節分の豆まく男二十才の子
春風やなれぬステッキもてあまし
朝月の眞上にありて梅三分

女（おみな）らの梅見に渡る粗筵
擂鉢に味噌する朝梅ひらく
逆らふて句会に集ふ春一番
大鍋に車麩煮ゆる雪解かな
風花の窓にややこの熟寝かな

倉田紀子

松村幸一

五目ずし家族が集う雛祭り
誕生を祝って画かれた雛の軸
ポップコーンはぜるごとくに梅ひらく
雪解けて土あらわれて花芽でる
梅の枝祝の皿に添えられる

浅野正美

吉羽多美子

帰る鳥しばし安らふ大河かな
春の海ひがな一日鳶の声
左義長の炎の上の銀河かな
雪女郎の棲むてふ山や雪しきり
寒梅や熱燗の眼を細めつつ

武者昭七

地震なゐの夜梅の木陰に仮宿り
雪代のたばしる堰の別れかな
雪解道堰の水音遠く聞く
藁靴に雪解け憎し通学路
梅に立つ枯木の如き我なりし

磯目健二

梅咲いて鮫は青いか黄色いか
節分や炬燵囲んで浮寝鳥
見当で投げた達磨のどんど焼
節分やおしるこ売る人ジーパンで

青木啓泰

煙突が町から消えて春の星

小山陽也

初午や参加するもの四人のみ
梅祭初めて参加抹茶飲み
桑の木は枝ばかりにて春を待つ
蠟梅を見てからあとに線香買ひ
初午が済んで榊を燃やしけり

磯目健二

一句鑑賞

雪女郎の棲むてふ山や雪しきり　昭七

夕暮れ迫る麓の山里から仰ぐ深山は雪雲に蔽われ霏々と雪が降り続けている。雪の夜に白妙の衣で現れるという雪女郎のメルヘンが信じられるほど山懐は深いのである。白一色の世界の幻想。

寒梅や枝に触るゝまで絵馬の嵩　孝三

たとえば早春の梅祭りの頃の湯島天神の光景。境内は神頼みの若人や家族であふれ、咲きほころぶ白梅の枝にかかるほど夥しい合格祈願の絵馬が奉納される。絵馬の嵩は一人一人の懸命な祈願の嵩でもあると思えば粛然とならざるをえない。

左義長の炎の照らす銀河かな　昭七

広場や辻で正月の火祭りが行われ、歓声とともに猛烈な火炎が天上高く立ち上る。燃え上がる炎の火先の彼方に空一面の天ノ川が流れている。地上の熱い炎の光と天上の星々の冷厳な光という雄大なコントラスト。

朝月の真上にありて梅三分　　多美子

有明のうっすらとした月のもとに、今しも白梅がほころび初めている、春の訪れも月光も梅花もすべて淡く仄かなのである。薄明の天地に現れ出た幽玄で清浄な刻ときに逢着するよろこび。

煙突が町から消えて春の星　　啓泰

今や最悪の煙害で汚染され、北京はかつて梅原龍三郎も描いた誇るべき秋天の美を失った。それと反対に日本では工場が市街地から遠ざかり、銭湯の煙突まで激減した。その結果、町の夜空は綺麗になり星空が戻ってきた。その典型となるのが有名な千住のお化け煙突である。火力発電所の四本煙突だったが、時代の変化で姿を消し、跡地は一時球場となりやがて安らかな住宅地へと変貌した。だがそこを通る常磐線の先に廃炉に苦悩する原発があることを忘れるわけにいかない。

雪解や球根既に目覚めをり　　陽一

万物眠るようだった真冬も過ぎて外では雪解が始まった。窓辺の水栽培の花鉢では、ヒヤシンスの球根が早くも発芽の兆候を示している、大いなる自然の胎動に感応し目覚める花のいのち。それを凝視する作者。

一句鑑賞　　飯田孝三

寒林の透きて還らぬもの多し　　陽一

「寒林」は古木の林、透けるのは道理、それを敢えて云う、透徹した詩心がそうさせるのだ。「還る」はもとの所に戻ること。はて「もの」、それは者、物、即ち神羅万象、生きとし生ける物の命の表象に他なるまい。「寒林」の沖に無常迅速の気を視るのである、無論、鴛鴦の過ぎし日の数々が胸裡をよぎるだろう。音便せぬ「透きて」は厳しく、「多し」は内に沈潜する。

左義長の炎の上の銀河かな　　昭七

燃えさかるどんどの炎の先に、春まだき銀河が横たわる。今し燃え逸る眼前の炎と、悠久の宙に滾る銀河とが天地に交響する。オ七連に加える一音は炎先に目を凝らしめ、頭一韻に呼応する脚ア三韻は、その遥かに広大な天空をくり展げ、加えて「銀河」の“ん”が弾んで、天地の息吹を生身に頓ひたと伝える。情韻相剰、「かな」はその場の感懐の深さ、大きさを知らせる。

雪解村茂吉の肉声流れけり　　みち

斎藤茂吉の記念館、実地臨場の句、雪深いみちのくに注ぐ春の日をうけ、館の一角から、茂吉の肉声が流れる。それを耳にした、不意の感動を詠み止める。大

地の春の息づきに呼応する「肉声」が如実。「肉声」が昭和天皇のそれに似るという、高志さんの旧作を思い出した。「けり」はとりも直さず、脈々たる生命の實相に触れた切実の感動の表白だろう。

如月や満艦飾のちらしずし　　多美子

「満艦飾」とはしたり、彩り鮮やかな「ちらしずし」が目に飛び込んでくる。いやはや、“きさらぎ”の調べと響き合い、春気横溢、まことにめでたさの一句である。口遊んで快、ア音イ音連弾のリズムは、自ずから春の生体の息吹を思わせる。さぞかし美味、句坐の皆さん、一箸いかがですか。

ポップコーンはぜるごとくに梅ひらく　　正美

溌剌の春の生気を目に見せてくれる。弾む口誦は明るく、心の弾みそのもの、思いがけぬ暖気に一斉に花ひらく一輪一輪が目の前だ。「ポップコーン」が憎い、まさに“やられた”との思い。初め、幸一さんも披講で云われたように、「ごとく」の直喩が気になったが、弾ける花びらを目に物見せてくれるあたり、合点のいく一手である。

蠟梅を見てからあとに線香買ひ　　陽也

肉親か身近な人の忌日の墓参である。寺門を入り、いち早く綻びた蠟梅に目を瞠り、思わず境内を一巡り、墓参りはその後と相なった次第。寒暖の忙しい昨今の陽気ならではの生活感があふれて面目。これも幸一さんの披講評のうけ売り、「あとに」はなくても意味は通る、それを敢えていう、無用の用がいみじくも手柄。「線香買ひ」と具体的に云った軽みが又いい。

見当で投げた達磨のどんど焼　　啓泰

野暮な講釈無用の一句。達磨を投げ込む男（いや女？）の素振り、火の猛るその場の様子が有態に目に映る。投げ「た」の口語ぶりが眼目、生きている。雅語づくしの俳句ではこうはぴんとこない。現代に息づく句を見る思いがする。かなを送らぬ、名詞止「どんど焼」は用辞周到。跳ねるリズムもどんど焼きの轟きそのもの、楽しい一句である。

一句鑑賞　　光成高志

落箔の月とも日ともお涅槃図　　幸一

落箔といい日ともといいお涅槃図といい涅槃図のパロディか思われる筋もあろう。いや、まじめな句ですね。後述の陽一さんのように、月でも日でもそこに円があれば構図は成り立つと言い放ってもいいわけだ。涅槃経に基づく釈迦の入滅の様子を描いたものといういわれは実であり、文芸上の虚にゐて実を詠ったんだと言われかねない。宗房（芭蕉28歳時）だって光源氏を光お源と町娘に仕立てたりしているでしょうと。

どよもすといふ明るさの春一番　　幸一

例会当日は2月17日、関東一円は何とも強い風に見舞われた。これを春一番とした手賀沼畔の句会場への途中吟であろう。「どよもす」とも「とよもす」ともいうのは響すと書くように、風の音もすごく鳴り響くし、沼面は捲られて黒くなるものの一面に明るい春の日を反射しているのであった。手賀沼や日を満面に春一番（孝三）、手賀沼の波の立つ見よ春一番（幸一）、逆らふて句会に集ふ春一番（紀子）、それぞれがこの日の春一番を描写されたのであった。

一句鑑賞　　武者昭七

寒林の透きて還らぬもの多し　　陽一

こういう句に出くわすと思わず粛然たる気分に誘われる。「もの」とは何を言うのかを特定する必要はない。僕らを取り囲むものの一切が二度とは「還らぬもの」だからだ。「寒林」は葉を払って寒々とした木々の群れ。いままで見えなかったものの影も透けてみえる。多くは二度と還らぬものたちの影だ。その影の懐かしさ寂しさ。

雪解や球根既に目覚めをり　　〃

自然の運行の速さに改めて驚くことがおおくなった。雪が消えたばかりと思っていたのに気付いてみたらなんとその下で、球根はもう芽を出していた。「既に」と「をり」の照応に自然の動きに対する驚きが踊る。

春風邪や馴れぬステッキもてあまし　　多美子

同じ経験をしています。春風の季節というのにステッキつかねばというのでは「わが青春よ、いずくに去りしか」と改めて感じてしまう。やってみてステッキあやつるのもなかなか難しいものと気づきました。

咆哮の屏風の虎の古りにけり　　幸一

古寺でよく目にする情景。勇壮な図柄を格調たかく一気に詠みあげた手腕に脱帽しました。「古りにけり」に屏風の上に流れて行った長い時間とそれに対する作者の詠嘆が感じられます。

初午や参加するもの四人のみ　　陽也

僕の生家にもお稲荷さんの祠があった。初午にはお神酒をあげ、正一位稲荷大明神と墨書したのぼりを立て、お赤飯を配ったりした。祠はいまもあるけれども当主が若い人に替わってからはさびしいものになってしまった。参加した四人のご老人（おそらく）も同じ思いで昔をなつかしんだことであろうなど想像しました。

逆らふて句会に集ふ春一番　　紀子

句会の当日は猛烈な強風で「春一番」を実感した。「逆らう」はその強風にもめげずということ。こんな

逆らいかただったら高志さんも大歓迎というところ。

一句鑑賞　　増田陽一

如月や満艦飾のちらしずし　　多美子

如月や、と言えば春寒料峭、余寒の厳しいイメージが来ると思いのほか、なんと『満艦飾』と『散し寿司』とは、対照の妙というか、大胆で心憎い表現である。船員だった三橋敏雄が読んだら喜んだかもしれない。春爛漫を先取りしたような華やかな、事実、散し寿司ならその具は幾らでも豪華に出来るし、景が目に浮かぶようである。

落箔の月とも日ともお涅槃図　　幸一

銀箔（であろう）が剥落して日だか月だかわからなくなっている時代物の涅槃図。寺に長くつたえられた由緒のある掛物かも知れない。構図からいえばそこに円があればいいので、どちらでもかまわない、ふるびた格調のある図。涅槃会も近い。

寒梅や熱燗の眼を細めつつ　　昭七

これは理想的な観梅の景であろう。「雛祭りの白酒」などは婦女子に任せよ。まだ寒い季節、やはり梅見は熱燗に限る、とばかり眼を細めている風流人、いいですね。穂毛氈の屋台か、梅林は熱海か、水戸か。

鶫つぐみ枯土手歩み胸を張る　　高志

鶫だ鶫だ。あそこの土手を歩いている。なんと胸を張って、誇り高い姿勢で、白い眉斑が鮮やかで・・と、作者は観察している。同じツグミ類のアカハラやルリビタキも冬は里に来るけれど、漂鳥で日本の山で繁殖する近縁種と違って鶫はシベリヤに帰らねばならない。帰途を思って空を見上げているのか。

寒梅や枝に触るゝまで絵馬の嵩　　孝三

万太郎踏みし石段梅明り　　〃

絵馬の嵩、ですぐ湯島天神の情景が浮かぶ。梅見頃は受験と重なるのであそこの合格祈願の絵馬の量には驚くばかりである。また万太郎を連想する江戸情緒はこの『梅明り』という巧みな措辞で決まりである。

雪解村茂吉の肉声流れけり　　みち

茂吉の故郷に近く多くの名作の残っている上山か、そこに茂吉の自作朗読の録音が聞こえるのである。歌は何か。上山であればさしあたり『朝来れば銃に打たれし白き兎・・』か、『ふた別けざまに聳え給う蔵王の山・・』か、僕も自作朗読は録音で聞いたことがあり、独特の野性味がある荘重な読み方には感動した。ゆかりの土地で聞くと一入であろう。『肉声』の語が茂吉好みの語感を伝えている。茂吉はこんな肉体性を引き摺った生々しい措辞が好きであった。

地震の夜梅の木陰に仮宿り　　**健二**

これは東北大震災のように読めるけれど、三月十一日昼の大地震とすれば、夜も余震は続き、寒い戸外に避難したであろう。不安の中に梅の香も慰めに足りぬ。しかし根の張った地面を僅かに頼りにした、辛い記憶のような気がする。

女（おみな）らの梅見に渡る粗筵　　**紀子**

梅は満開で、前の日の春雨か雪解けで地面がぬかるんでいるのか。天候の移り易いこの季節、敷かれた筵の上を盛装の婦人達かもしれない一行が足もとの用心をしながら梅に近づいている。滝春一の『後頭に敷く粗筵』の男ぶりとは違う、雅な『女ら』の梅見である。

ポップコーンはぜるごとくに梅ひらく　　**正美**

梅の蕾は丸くて、成る程、爆ぜる前のポップコーンにとても似ている。童心のようなイメージの鮮明な句。

俳窓評論纂

＊朝日新聞 1月30日朝日俳壇の俳句時評に「近代の光と闇」恩田侑布子が出た。年末に続いての寄稿である。子規生誕一五〇年の今年、書評論「獺祭書屋俳話・芭蕉雑談」について復本一郎の解説が懇切。快刀乱麻の書である。子規の俳句観を述べて小気味よい。雪舟や若冲らの中国画を咀嚼し突き抜けた写生は継承されず、近代の闇は現代に及ぶ。「あかくと日はつれなくも秋の風」について子規の身体感覚ではこの句の身悶えとたゆたいの空間は味わえなかった。現実密着型の写生では蕉風の余白と多義性は平板化してしまう。子規は三五歳の死を受容して痛苦を活発な精神の位置エネルギーに変換し、和歌俳句の腐敗と闘った。自らを開拓し続けるのが「尊厳死」だと勇者は語る、とある。

＊第13回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞したこうの史代の同名コミックを片渕須直監督がアニメ映画化。第2次世界大戦下の広島・呉を舞台に大切なものを失いながらも前向きに生きようとするヒロインと、彼女を取り巻く人々の日常を生き生きと描く。昭和19年、故郷の広島市江波から20キロ離れた呉に18歳で嫁いできた女性すずは、戦争によって様々なものが欠乏する中で、家族の毎日の食卓を作るために工夫を凝らしていた。しかし戦争が進むにつれ、海軍の拠点である呉は空襲の標的となり、すずの身近なものも次々と失われていく。それでもなお、前を向いて日々の暮らしを営み続けるすずだったが……。平成18年から21年まで、「漫画アクション」にて連載された昭和18年から21年までの物語。朝日の21日の文芸欄にも大きく載った。こうの史代さんは『足で描け』と高校の恩師に教えられたとか。絵もおぼろに描いて

いてかえってリアリィティが出ている。呉はみちさんの疎開前の地でいろいろ所縁ゆかりがあるとか。

早春記（糸魚川）

武者昭七

立山修験の名残に接したくて、残雪の立山風土記の丘を訪ねた。三月の初めだった。その帰り、糸魚川の町に立ち寄った。越しの奴奈川姫ぬなかわひめの町である。市役所のすぐ裏手に姫を祀る奴奈川神社がある。奴奈川姫とは姫川から産出されるヒスイの人格化されたものという説もあるそうな。古くはヒスイという玉の産地として、下っては塩の道の起点として栄えた町のためか、今歩いても一種の風格に似たものを感じる。何軒もの家に見事な梅の古木があって、それが北陸の早春の気分を満喫させてくれた。今を盛りの木もあれば、花を払った木もあった。紅梅もあれば、白梅もある。後ろには雪をかむったままの山並みもあるのだけれど、海が近いせいか、吹く風にかすかな潮の香りもにじむようで、柔らかだった。この町には時間がゆっくりと流れている、そんな気がして足の運びもゆったりした。すこし前までは桜の花にひどく気をひかれたものだけれど、この頃は梅の花にひかれるのを感じる。旅行会社などの、毒々しいまでのカラー印刷の桜の名所案内を見せつけられることが多くなったせいなのか。たまに訪れる桜の里がどこも喧騒にみちているせいか。桜に比べると梅は静かである。かすかな香りもなつかしい。人里の梅はとくにいい。勝手に自分で咲いていますという感じである。それでいて決して人を拒みはしない。さあ、見てよと人に媚びることもしない代わりに、ひがんで人に背を向けることもしない。見る人は見ればいいし、見てくれなくとも別にいいんだ、という感じである。だから気持ちがいい。すがすがしい。それが早春の気分にぴったりするだろう。梅といえば、なによりも蕪村の句を思い出す。実は僕は、糸魚川の町を歩きながら、「一もとの梅に遅速を愛すかな」という句を思い出していたのである。一本の梅の木にも、はやくも全開の花もあれば、蕾のものもある。それ程にゆったりと時間は流れている。蕪村は一本の梅の枝に、流れ行く時間を愛惜している。これからの我が時間もかくあれかし。そんなふうに思いながらぶらぶらと町を歩いたのである。帰ってから確かめてみたら、「一もと」ではなくて「二もと」であった。のみならず、「二もと」とは、友人の樗良と自分のこと。お互い相競って個性的な新風を開花させようとの誘いだとある。鼻白んで、他に当ったら、「草庵」という前書きがあり、「幾日も心をとめている時間の経過と場を示す」とあった。こっちに軍配を挙げたい。新潮日本古典集成

「与謝蕪村集」・岩波古典文學大系「蕪村集・一茶集」（98.3.17）

受贈誌（H29年2月号）

首出せしところ大根青日焼（彩133号）　平野ひろし
草萌ゆる野佛土留め役をして（〃）　〃
宰領は八十二歳浜焚火　（〃）　〃
海苔簀のごと大群の浮寝鴨　（〃）　佐藤恵子
秩父夜祭神輿の渡御に神馬蹤く（〃）　平山三郎
籾殻の山に稲の芽ほつほつと（〃）　小泉　博
元朝の沖に一礼真潮の香　（あすか2月号）　野木桃花
雪解けの流れに沿うて一歩二歩　（〃）　〃
金柑や大日如来漆黒に（〃）　山尾かづひろ
早春の峡の底より煙立つ（東京ク2月）　文男
早春の幟はためく屋敷神　（〃）　璃子
春泥の乾びかけたる猫車　（〃）　〃
見沼野を出でし浅春の濁り川　（〃）　理佳江
麝香猫電線わたる歌舞伎町（小熊座381号）　増田陽一
クロマニヨンも混る寒夜の常磐線（〃）　〃

こだま

神無月皇帝ダリア花かゝげ　（彩133号）　光成高志
白鳥の群れ鷸の群れ混じり合ふ　（〃）　〃

山尾かづひろ吟行ノート（H29・02・08）

春の日の鷗舳先にスカイツリー　飯田孝三
ふるさとの便り遠のく蕗の薹　〃
春の日や硝子張りなる歯科医院　光　みち
春日射す靴の汚れをはづかしむ　〃
蠟梅が真っ黄に咲いて曇空　光成高志
黒髪の乱れに群るゝ胡麻斑蝶　〃

賢治　銀河鉄道の夜　武者昭七

ジョバンニを隣に置いて「おっかさんは、ぼくをゆるしてくださるだろうか。いきなりカンパネルラが思い切ったというように、少しどもりながら、せきこんでいいました」というこの一節はカンパネルラの深い孤独と苦しみを僕らに強く伝えてくる。

カンパネルラは水に落ちたザネリを我が身を犠牲にしてすくったけれどそれが母親にとってはたして納得できる行為であったかどうか彼には確信がもてないのだ。母親の気持を考えれば当然のことだろう。ましてや彼はひとりっ子なのだ。カンパネルラは続けていう。「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸いなんだねえ。だからおっかさんは、ぼくをゆるしてくださると思う。」湧いてくる悲しみと疑問を必死に抑え込みながらカンパネ

ルラはなんとか自分を納得させようとしているのだ。ジョバンニの孤独をいうひとは多いけれどぼくらはそれ以上にカンパネルラの孤独とかなしみに心づかいをすべきだろう。

「ほんとうにみんなの幸せのためならば僕のからだなんか百ぺん灼てもかまわない」と高らかに言い切るジョバンニ。しかしすぐに「ほんとうの幸せとはいったいなんだろう」と問いかけるジョバンニに「僕分からない」とカンパネルラはぼんやりこたえるだけだ。ジョバンニには明確な方向性（理想）があたえられているのにカンパネルラにはそれがないのである。カンパネルラは一人で暗い夜の川になげだされたままだ。

二人の前に突然真っ暗な天の穴「石炭袋」が現れるのはその直後である。天の川の一角に開いた底知れぬ深く昏い穴。「僕はもうあんな大きな闇の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たちいっしょに進んで行こう」というジョバンニの励ましにもカンパネルラは「ああきっと行くよ」と答えるだけですぐに話題を切り替えてしまう。

カンパネルラの指差すのはみんなの集っている「きれいな野原だ。カンパネルラはにわかに窓の遠くに見える野原を指して叫ぶ。「あすこがほんとうの天上なんだ。あっ、あすこにいるのは僕のお母さんだよ」しかしジョバンニにはそれはみえない。ただぼんやりと白く煙っているだけだ。底なしの黒々とした穴と、きれいな野はらの深い対照と断絶。

ここで僕らは戸惑う。本当の天上とは銀河の果ての死者の住まいであるとすればカンパネルラの母親はすでに亡くなっていることになるし、生存しているとすれば現世の母と天上のひとと二人の母親がいることになる。そして「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」という父親のかたわらには母親の姿は見えない。

「ひかりの素足」の中で如来は死者である檜夫に向かってお前の「前のお母さんを見せてあげよう」といい雁の童子の中で童子は前世の自身に出会う。カンパネルラは現世の母を超えた前世の母、あるいは時空を超えた永遠の母なるもの（母性）に出会ったのだろうか。カンパネルラがジョバンニの隣から消えたのはその直後である。カンパネルラはどこに消えたのか。

銀河鉄道は死者たちを乗せて中有を駆け抜ける四次元幻想の列車だという。中有を抜けた新しい「生」（生有）があるとすればカンパネルラはジョバンニのもとにまた還ってくるのだろうか。二人はほんとうのみんなの幸せを捕まえることができるのだろうか。銀河鉄

道の行きつく先はどこなのか。

芭蕉のかるみ以後（33）

光成高志

午暖叢間尚露華　午ひる暖かにして叢間そうかん尚露華あり。
残黄耄紫相交加　残黄ざんこう耄紫ぼうし相交加こうかす。
蟷螂熟視人来立　蟷螂人の来りて立つを熟視して、
徐自蘆花移蓼花　徐おもむろに蘆花より蓼の花に移る。

晩秋の頃、午は暖かく叢には尚露の華があり。咲残り色褪せた黄の華や紫色の花が重なりあったままだ。かまきりが人の来て立つのをじっと視ておもむろにじわっと蓼の花に移って行った。

茶山は蟷螂の身になってその思いを読みとり、動きを表現している。蘆と蓼は大体丈が同じであるから、蟷螂が移るのは納得いく。先の昭七さんの蟷螂の句は、お互に貌を見つめ合っているとあったが、熟視している時がその状態である。貌中が目玉のような蟷螂を見つめる茶山と昭七さんをまた想像できた。この漢詩からは「蟷螂の蘆より蓼に移りたり」という俳句ができる。夏日の子供とのやり取りが想像できる詩を二つ。

村童日日挟書来　講席偏愁暑若煨
帰路逢牛臥涼處　直將牧竪疊騎歸

村童日日書を挟んで来る、講席偏に愁ふ　暑くして煨わいするが如し。帰路牛の涼處に臥するに逢ひて　直ちに牧竪ぼくじゅと疊騎でんきして帰る。

煨わいするが如しというのは埋火で炙るようであるという意味だ。夏の簾塾は暑い。子供たちは授業が終わると教室から飛び出して帰路に着く。途中、涼しい所に牛が臥せっている。傍らにいる牛飼の子に頼んで二人乗りして帰って行った。ここで思い出したのは、私の句「亀鳴くや牛逃げてゆく追いかける」（H 10）を故美清流さんが十牛図にそういう場面があると言われたことだ。先に禅展を見に行ったらその軸が展示してあった。この茶山の漢詩のような場面もあるが、まさか十牛図を踏まえたものではないだろう。この詩から「牛冷し少年二人乗り帰る」という句が出来た。

郊雲四散夜澄清　頭上銀河似有聲
隣稚貪涼猶未寝　逐來吟杖問星名

郊雲四散し夜澄清、頭上の銀河聲有るに似たり。隣の稚涼を貪り猶未だ寝ねず、吟杖を逐ひ來り星の名を問う。夜空はよく澄んで、頭上の銀河は流れの音が聞こえるようだ。隣の稚はまだ寝ようとせず、散歩について来て星の名を訊ねる。

茶山にはまとまった詩論というものはないが、交際のあった詩人や北條霞亭に宛てた手紙の言葉から窺うと次のようになる[15]。

1　詩は極力実境を写すこと。実際に自分が出逢った

実事に対し、胸中に湧き上がってきた思いを自分の評言で述べ写すのが真の詩である。

2　ある人が喜び好むところは、大抵の人が喜び好むものであるが、それを発する心は各人各様であるのだから、千篇一律の詩が出来る訳がない。詩は心の中に湧いてくる情でそれが抑えきれなくなって言葉として詠われるものだ。それぞれが抱いた興趣がそれぞれの境地から発せられてこそ、真の詩である。

3　詩は自分の体が時流に合うかどうかを考えたり、人の物真似で作ったりすべきでない。また、人の思惑を考え、誉れを求めて人に媚びるような詩を作るべきではない。世間の評価は気にせず、自分の感じた思いを詠いたいように詠う。それが詩作の楽しみなのだ。

4　不朽であろうと意図せず、自ら不朽となる、そういう詩を作るべきだ。俳句を作る時の心構えもかくありたいものだ。㈥管茶山　西原千代　白帝社　広大博士論文

平成21年　（H 28 11.15）

お便り広場（到着順、敬称略）

拝啓　この間正月したと思ったのに、もう一月も過ぎてしまった。一月はいぬる二月は逃げる三月は去るとの通り。桜の花が咲く頃まではあっと言う間に過ぎてしまう。白金葭１月号受けとりました。拓也も晶子も心やさしい大人になっていると感じました。病みあがりだから無理せぬようにと心にかけているようです。お互いに高齢になりました。自分のペースを忘れずに無理がきかなくなりました。（中略）高志はその後体調どうなのかと思いますが正月に拓也が行ってお世話になったとありますので大丈夫なんだろうと思っています。あまり一生懸命にならずにマイペースを忘れずにお互に暮らしませう。私は元気でいます。敏子さんによろしくお伝えください。

読み書きに歩くをそえて老いの春　（2.1　健三）

〃　春立ちぬ

光成様　冠省お元気でご活躍のことと存じます。過日浅野様よりお母様の出版記念会食の際のお写真とお手紙が送られて参りました。とてもお幸せそうで私どもも幸せな気持ちになりました。これも偏に当社をご紹介くださった光成様のおかげと深く感謝致します。本当にありがとうございます！！奥様にもよろしくお伝えください。　（2.4　木戸敦子）

気象予報士が「寒さの底」と云った日から急に気温が上がった日があるかと思うと、氷りの張る日が続いたりですが日中の青空や日照を見ると「寒い」と口にする日がもうすぐ無くなるのではないかと期待してしまいます。　一月号御誌を拝受してから日が経ってし

まいました。

初優勝なるか初場所稀勢の里　　浅野正美

優勝を心待ちされるお気持のとおりになり、自ら風格も話しぶりもそれらしくなりましたね。みち様から頂いた慈姑は芽を落とすことなく皮を剝くことが出来、うまく煮ることが出来、不思議な触感を味わいました。若い者に美味しいかと聞いたら?。土の中から青いものがいろく出はじめました。一と雨欲しいところです。五日の日曜あたり降るようでございます。俳句は春から始めるのが良いと、昔深川正一郎先生から聞きました。季題も多く、創りやすいようにも思います。知らずに肺炎にかゝっていた話を聞きました。長びくセキなど要注意です。白金葭の二月はどんな様子か表紙が楽しみです。　お大切に　　（2.4　璃子）

先週、高橋睦郎の本を進呈いたしましたが（中略）鴎外の「伊沢蘭軒」を三分の一ほど読了。蘭軒は長崎奉行赴任に随行して江戸から中山道を28日かかって備後神辺に着き、茶山の黄葉夕陽村舎を訪れています。長崎到着は46日目。足の悪い蘭軒は駕籠に乗ったようですが峻険な山道では徒歩もあったみたいで、さぞ苦労したことでしょう。帯状に長い列島の旅は幕府高官といえども大変な時間がかかっていることに一驚しました。漢詩を通しての江戸期文人の熱い交流（長崎では清人とも）の様子が伝わってきますが、蕪村などとの交流も後半に触れられているかと楽しみにしています。　　（3.7　メール　健二）

いつもよくしていただきありがとうございます。無事草太も中学試験に合格しましたので、マドレーヌを焼きました。桜の花の梅塩酢漬けです。干柿は近所の八百屋で安く手に入ったのでオスソ分けです。呉の映画を観ました。広幸さんがファンで5千円の寄付をしたら葉書が何枚も届いたので数枚あげます。いい映画（*この世界の片隅に）でした。戦艦大和もでてきました。では三月に湯島でお会いできる日を決めましょう。　　（2.10　晶子）

寒い日が続いております。なんとか元気でいます。会費同封致します。古代は別便です。一度五メートル以上の豪雪地帯を行きましたが、その年は全く雪が少なくガッカリしました。駄句送ります。　（2.13　陽也）

お世話になります。確かに春の空気が流れています。　　（2.14　啓泰）

もう少しの辛抱で早も浅もつかない春になることでしょう。その後お体調いかゞでいらっしゃいますか。季節の変わりめご用心下さいませ。一番エサの少ない今、野鳥が少なくとも十種来ます。鳥のようにおたがいさまに今もこれからも元気印でまいりましょう。　（2.14　璃子）

昨日は旗亭での歓談じつに愉快でした。優れた仲間との交流を深めるよう配意された主宰の懇情に深く感謝しています。ご下命の「一句鑑賞」をお送りします。どうしても偏狭な主観のバイアスは避けられないようです。お許しください。

（2.18　健二）

先日の例会、みな元気な顔をそろえて楽しい一時でした。健二さんを迎えてのコビアンでの交歓もよかった。鑑賞の駄文をお送りします。毎々、お手数をかけますが、よろしくお願いいたします。春は名のみ、寒暖忙しい不陽気です、お二人とも呉々もお大事に、ご健吟のほど祈りあげます。

（2.19　孝三）

我孫子日記

1/20	例会
1/23	* 木下
1/25	SOA
1/28	*2 木下
1/30	*3 利根川
2/1	SOA
2/3	*4 成田山
2/8	SOA
2/15	SOA
2/17	例会

*　大寒や不撓不屈の横綱碑　　高志

*2 下手賀の沼干拓田春を待つ　　〃

のどかさや土堤の下なる観音堂　　〃

*3 鴛鴦もゐる利根川の鴨の列　　〃

牧水の歌碑立つ河畔いぬふぐり　　〃

*4 力士五人最上段にせつぶんえ　　高志

豆まきの豆の袋は届かざる　　〃

固き枝真直ぐ枝垂れ梅ひらく　　〃

ヘリコプター回旋始め節分会　　みち

落花生四百キロ撒くと節分会　　〃

編集後記

今月号は選句欄を省略しました。編集の自由度をあげるためです。その代わり季語探訪的なものを載せようと思っていたところ、以前、孝三さんから頂いていた昭七さんの「早春記」が出て来ましたので、これを掲載しました。少しお若い頃の昭七さんの個性ある文章に触れてうれしくなりました。文末に私が「和漢朗詠集」をご覧になったでしょうか？とメモ書きがあり、又文献の後者は先に健二さんから頂いたもので、今私の手元にあるのも不思議なご縁を感じます。冒頭に書いたことをよく考えると、句会報を卒業して、俳誌として出発するということです。

白金葭 2月号（第72号）平成29年2月発行
編集・発行人　光成高志：（〇四―七一八七―一〇六八）
発行所　270・1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字：加納綾女。写真：2月22日の白金葭